

## 「イエス御自身は・・・信用されなかった：信じるということ」

### ヨハネによる福音書 2 章 23～25 節

イエス・キリストにおいてご自身を啓示された神こそ、父・子・聖霊として働かれる、唯一の、全知全能の神である。神は愛と自由において天地を創造し、これを支配したもう。イエス・キリストは神の子として、みむねに従って、人となり、すべての人間の罪の救いのために十字架につけられ、三日目に死より復活し、それによって罪と死を克服し全世界の主となられた。聖霊はイエス・キリストのすべてのわざを私たちの内に直接<sup>あか</sup>証しし、信仰の実を結ばせ、私たちを神の栄光へと導きたもう。

私たち人間は神の<sup>かたち</sup>像に似せて造られたが、罪に<sup>お</sup>墮ち、神に背くものとなった。それにもかかわらず、私たちは神の恵みのもとにおかれ、イエス・キリストにおいて神の救いに招かれているものである。信仰はイエス・キリストを信じ受入れ、罪を悔い改め、全身全霊をもってキリストに従うことである。この信仰によってのみ、私たちは神に義とされ、新生にあずかることができる。

日本バプテスト連盟の「信仰宣言」(1979 年版) から抜粋した文章で、冒頭の前文に続く本文最初の書き出し部分となっています。バプテストの場合、こうした信仰宣言は諸教会の協力組織たる連盟等のそれであって、各個の教会が持つそれぞれの「信仰告白」と同一でないのは言うまでもありません。連盟等を構成する諸教会に共通して見られる信仰内容を絞り込んでまとめ上げたもの、と言ったら分かりやすいでしょうか。ですが、そうであればこそ、そこにはエッセンスとも言えるような内容が集約されて記されている、と言えなくもありません。いずれにせよ、そんな信仰宣言を初めに御紹介したのは、今月の聖書箇所に関わる事柄がそこに含まれているからです。それは、いわゆる奇跡的な出来事をめぐってです。この点について、本論に入る前に少しばかり、御一緒に思いをめぐらせられたらと思います。

一瞥<sup>いちべつ</sup>してお分りのとおり、上記の信仰宣言には奇跡的な出来事が記され、かつそこで それらを信じる信仰が表明されています。私もまた 基本的にそれらを信ずる者ですが、その中心を<sup>か</sup>掻い<sup>つ</sup>摘まんで述べれば、次のようになるでしょうか。すなわち、神の子イエス・キリストが人となられ、私たちのために十字架につけられた。しかし、3 日目に復活され、生ける主として この私たちを救いへと導いてくださっている、という信仰です。こうした奇跡的な出来事はたしかに、聖書の信仰を支える生命線と言えるでしょう。そのことを、まず初めに押さえておきたいと思います。今月の第一点です。

けれども、それと同時に、大切なことがもう一つあるように思わされてもいます。それは聖書の読

み方に関する事で、つまりは、聖書は必ずしもその字面を一点一画、表現の幅を認めないほどにギスギスした仕方を読む必要もない、ということです。かなり古い話ですが、以前、こんな経験をしたことがあります。聖書は、この世界には終わりの時があり、そのとき イエス・キリストが私たちのもとに再び来られる、と語ります。キリスト教用語で「再び臨む」と書く「再臨」と呼ばれる約束です。ところが、あるときその来方が話題になったのでした、「いったい、どんな仕方で来られるんだろうか」と。そのとき、軽い私がつい、口を滑らせてしまった。それが事の発端でした。「どんな仕方だっていいんじゃないかな、新幹線に乗ってこられたって・・・」と、冗談交じりに言ったその一言。それにすかさず、非難の一撃が返ってきました。「何言ってるんですか。雲に乗って来られるんですよ、雲に乗って」と食ってかかられたのを、苦くも懐かしい思い出として思い起こします。少しく気色ばんだのは、中年の男性教会員でした。聖書の終わりの書である「ヨハネの黙示録」に、「見よ、その方が雲に乗って来られる」(1:7) とあるからです。真面目な方でしたが、少しばかり人間的に幅がなく、何かにつけ、自分が裁き手になる方でした。文学的、詩的、比喩的、文化的、歴史的・・・といった類いの表現は、当然のこと、聖書にも存在します。とりわけヨハネの黙示録は、ローマ帝国による迫害下、その内容を悟られないよう、暗号擬きの言い回しを鏤めて記されています。幅と奥行きのある読み方が必要になります。「雲に乗って来られる」という表現にも、それはそれでたしかに、それなりの意味があります。ですが、そのメッセージの核心を突き詰めるなら やはり、どんな仕方で来られようがいいのではないのでしょうか。イエス・キリストが再び来られるということ、そのようにしてすべてが神の最終的御意思のもとに置かれるということこそが要諦と思われるからです。字面を追うだけの表面的な読み方で本来のポイントを見失わないようにしていきたい。狭く凝り固まった在り方で信仰の幅や豊かさを失わないようにしていきたい。そして、奇跡的な事柄を材料に自分が神ようになって人を裁くことのないよう、気をつけていきたいと思わされた幸いです。これが、今月の内容に関わる第二の点です。

以上の二つの点を心に留め置きながら、今月の聖書箇所に入りたいと思います。今月の聖書の箇所は、23 節に見るとおり、「イエスは過越祭の間 エルサレムにおられたが・・・」と始まります。つまり、前回の「宮清め」が過越祭を間近にして イエス・キリストがエルサレムに上られた折の出来事だったことを思い返すと、今回の記事はこれに続くものであることが分かります。そして、この後 3 章 1 節からは、律法に厳格なユダヤ教のファリサイ派に属し、ユダヤの最高法院の議員でもあったニコデモと主イエスとの問答が続きます。主イエスがエルサレムの神殿でなされたことを聞きつけ、また民衆の間にこれに好意的な興奮が生じていることを知って、ニコデモは夜 慌てて、主イエスのもとを訪ねるのでした。ニコデモは、ユダヤ教を中心とした 当時のユダヤ社会の体制を代表してもしました。こう見てくると、今月の箇所は前後の記事を結ぶ「繋ぎ」の部分と言えなくもありません。しかし そこに、見過ごしにできない、さらに言えば 聞き捨てならない言葉が記されているのです。24 節の言葉です。「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」。どこかシニカルで寒々しく、虚無的で捨て鉢にも聞こえる言葉ではないでしょうか。けれども、ヨハネが

記すこの言葉の裏には、「信じるということ」の本質に関わる重要なメッセージが隠されているようにも思われます。当時、ユダヤの人々もちろん、信仰を持ってはいました。ニコデモも同じです。しかしそれらは、イエス・キリストの求められる信仰とは大事なところでズレていた。ピッタリ噛み合っていなかった。そうした重要な指摘を込め、ヨハネはこの短い結びを挿入しているように感じられます。その意味で、今回の箇所は、軽々に扱うことのできない重い結びの部分と言うべきでしょう。

私たちが折に触れて考え、また口にもする問いに次のようなものがないでしょうか。「人として一番大事なことは、いったい何だろうか？」そして、これに対してまた、次のような応答をよく耳にしはしないでしょうか。すなわち、「信頼しうる人間になることだと思う」。つまり、信用できる人間になる、ということです。問いに対する答えとしては おそらく、ほぼ異論のない返答かと思われます。模範解答とも言うべきもので、いわゆる正解の一つと言えるでしょう。実際、そんな人間であれば なんとうれしいことか、とこの私も思わされてなりません。ただし、そこに潜む微妙な緩さに気づいているか否か。密やかな甘さに気づいているか否か。それを、なお一つのこととして、私たちは自問自答せざるをえないように思うのです。なぜなら、「この自分なら そうなれるかも・・・」と、根拠の不明な自信を無言のうちに、また無意識のうちにどこかで抱いている自分を感じるからです。しかしながら、私たちははたして、根っこの根っこから心底 信用できる存在でしょうか。ギリギリのところ追い込まれたとき、私たちの正体はいったい、何を露わにするでしょうか。

これも少し前になりますが、NHK の教育テレビ（現在の E テレ）で、一人の障がい者を紹介する番組を見ました。20 代後半の女性、A さんです。A さんは、右腕の半分と右足の全体がありません。骨盤もないとのことでした。17 歳の高校生とき、事故で失ったといいます。傍らには、幼稚園児の娘さんがいました。片腕・片足なしで一人で育てているといいます。聞けば、悲しすぎるほどの悲しみを背負っている方でした。事故の後、A さんは、障がいがあるにもかかわらず、自分を愛してくれるという人に出会いました。そうそういはいはしない、とても良い相手に出会ったわけです。幸せな時が続きました。そして、生活を共にするようになりました。となれば 当然、妊娠します。そこで、ふたりで正式に結婚することを決め、その旨 家族に話しました。ところが、それが悲しみの始まりとなったのです。相手の両親は、ふたりの結婚に猛反対。「手がなかったら、泣く子にどうやってお乳をあげるの」と、子どもを産むことにも反対されました。叱責は、さらに続きます。「息子は事業を継ぐんだから、嫁が障がい者じゃ、面倒よね」。身に負った傷を容赦なく刺し貫く言葉にいたたまれなかったにちがひありません。けれども、本当の悲しみと痛みはこれらの後に来ました。両親の説得に努めていた、A さんの信頼し切っていたその相手がある日ついに、彼女を置いて家を出て行ってしまった。A さんと両親との板挟みに苦しみながらも、が 時とともに、A さんに対する思いを変えて 結局、安定と保身を選んだのでした。A さんは言っていました。「事故はたしかに辛かったけど、信頼し切っていた人に裏切られて、置き去りにされたこと

が本当に悲しかったです」。目には涙が浮かんでいました。人の真実に失望し、人生に絶望したにちがひありません。救いは、シングルマザーになることを覚悟のうえで、Aさんのお腹なかの子を出産し、子どもさんと二人で毎日を精いっぱい生きておられることでした。大きな障がいを身に負っての子育て生活です。私たちの想いもよらない御苦勞があられることだろうと思います。ただ、お腹に子どもがいたということ。そのことが逆に、自暴自棄に傾くAさんをお押し止めたようです。「一人じゃない」との思いです。誰かが一緒にいるというのは、一緒にいてくれるというのは、ここでもやはり、救いであることを思わされました。Aさんの相手は決して悪い人ではありません。むしろ、普通の人以上に勇気のある、善意の人と言うべきでしょう。そんな人でも、事と次第では心が騒いで動揺し、損得の勘定が片隅に頭をもたげ、そして保身と言いつつ逃げ足が動き始める。いわんや、この自分なぞは・・・です。

とはいうものの、Aさんのようなケースはたしかにちまた巷にそう多くあるわけでもなく、普通の私たちの普通の日常からはどこか縁遠く感じられるかもしれません。事の本質としては本当は同じ質の問題性がそこに隠されているのですが、では、情景をグッと身近に引き寄せて、それこそ日常を感じさせるこんな一句はいかがでしょうか。『一言絶句』という川柳風の句集に載った作品です。

右目でしっかり 世の中を見て、左目でちゃっかり君きみも見ている。

風刺の笑いを集めた句集ですが、どこか笑えない、ドキッとさせられる句ではないでしょうか。「君のことを見詰めてるよ。でもね、周囲の空気や潮目や、思わくや計算をしっかりと考えながらだ。そのことを君に気づかれないように、上手じょうずにね」とは、私たちの隠し置きたい姿を言い当てて、なんと鋭い眼力がんりきなのでしょう。「君」とは言うまでもなく、恋人の君にとどまりません。人間関係のすべてに及びます。日々のその人間関係にどこか真実でないものが忍び込んでくる、私たちの内側から。いかがわしい関係性が密やかに紛れ込んでくる、私たちの心しんちゆうの中から、と言うのです。単なる笑いで済まされない事実を語っていて、身につまされる思いがします。

ヨハネは記します。「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」。そして、言います。24節、25節、「それは、主イエスがすべての人のことを知っておられたからであり、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたからである」と。実に鋭く厳しい言葉ではないでしょうか。しかし、身ぐるみ剥がれ、心の内まで裸にされて神の前に立たされたとしたら、はたして私たちの誰が「自分は非の打ちどころのない、全く信頼に足る、信用できる人間だ」などに見得を切れるのでしょうか。Aさんの相手だけのことでもなければ、一言絶句の世界だけのことでもない。事の大小の問題でもなければ、人の前でどうかという問題でもない。神の前でどうか、と問われているように感じます。私もまた、律し切れない思いで心を波立たせるからです。

過越祭の間、イエス・キリストはエルサレムにおられました。そして、そこで「しるし」を行なわれたことが23節から分かります。「しるし」については、前々回の「カナの婚礼」のところで短く

触れました。すなわち、「ヨハネによる福音書」は、いわゆる「奇跡 (δύναμις, -εως, ἦ)」という表現を一度も使っていないこと。そこに見られるのは「しるし (σημεῖον, -ου, τό)」という言い方であり、「業 (ἔργον, -ου, τό)」という言い方だけであることです。とりわけ「しるし」という表現は、事を行なった人物について、何事か意味ある事柄を示す場合に使われました。ヨハネは専らこの言葉を使っており、いわゆる奇跡的な出来事だけでなく、普通の仕業にもこれを当てています。それはとりもなおさず、「奇跡的な出来事はそれ自体で重要なのではなく、その裏に何事か大切な真理が置かれているからこそ 意味がある」ということでした。だからこそ、ヨハネによる福音書はそれらを「しるし」と呼んで、いわゆる奇跡的な出来事だけを特別扱いしなかったのです。実際、主イエス御自身、そうしたことが単に人々の目を惹き付けるだけのものになることを嫌って、それらに消極的な態度を取ってもおられます (マタイ 8:4、マルコ 1:44、ルカ 5:14 他)。いずれにせよ、イエス・キリストは過越祭の間、エルサレムでそうしたしるしをなされました。23節の「しるし」は、原語のギリシア語では複数形 (τὰ σημεῖα < σημεῖον, -ου, τό) になっています。前回 学んだ 2 章 13 節以下の「宮清め」をはじめとして、病気を癒やすなど、ほかにも幾つか意味ある業をなさったと考えられます。そして、その「しるしを見て、多くの人イエスの名を信じた」と、同じく 23 節で ヨハネは語ります。皮肉な、嫌みなニュアンスはありません。イエス・キリストを主と信じると言うときの、普通の言い方 (ἐπίστευσαν < πιστεύω) です。つまりは、多くの人たちがこの私たちと同じように、イエスを主と信じたというのです。だとすれば、だからこそまた、事は見過ごしにできないように思われます。私たちが口にすると同じ信仰の告白を、多くの人々がした。けれども、それに対して イエス・キリストは「その彼らを信用されなかった」というのですから、やはり穏やかではありません。神殿であくどい商売をしていた悪い奴らの話なら分かります。しかし、ヨハネは言います。「それは、主イエスがすべての人のことを知っておられ・・・何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたからだ」と。どうやら、例外はないようです。文字どおり「すべての人」の本質に向けられた言葉のように思われます。クリスチャンもノンクリスチャンもなく。

それは すなわち、私たち人間の気紛れではないでしょうか。無責任で身勝手な心変わりです。主イエスは知っておられました。人々は、目につくしるしを行なっている間は自分に目を向け、自分についてくる。目を瞞る不思議な業を行なっているときは、とりわけそうである。だが、一たび華やかさと無縁の仕える生涯を生き、十字架の上に神の愛を示すとき、そしてまた その同じ生き方を人々にも求めるとき、人は皆 この自分から去っていく。そのことを、主イエスは御存じでした。私たちは目に見える華やかなパフォーマンスに目を奪われ、身を低くして仕えるというそのような姿をどこかで敬遠するからです。そして、神の御旨に仕え、隣人を愛することを求められると、気づかれないように 静かに主イエスのもとを去ります。自分好みの欲しいものを貰うことには熱心でも、イエス・キリストの心を自分の心とし、自分もまた 主イエスと同じ十字架を負うということには躊躇いを隠せません。主イエスがもし、しるしを見て興奮し、自分のことを信じた者たちにその身を委ね、彼らの前でパフォーマンスの宣言をされたなら、人々は主イエスをメシアに祭り上げたことでしょう。

ですが、その後<sup>あと</sup>に来るのはいったい 何でしょうか。自分たちの好みのイメージを押し付け、しかし相手がそのとおりに振る舞ってくれないとなると、今度は一転「なんでえ、馬鹿馬鹿しい。裏切りやがって」と、憎しみを返す人間という存在の身勝手。実際、イエス・キリストはそのようにして、十字架に追いやられたのでした。人々は時々の気分や感情に浸って酔いはするものの、自分が求める信仰の深みを示すと、その波は見る間に引いてしまう。主イエスはそのことを知っておられたのでしょ。う。ですから、人目を惹くだけに終わりかねない いわば利<sup>せつなてき</sup>那<sup>てき</sup>的とも言える業に、イエス・キリストは慎重であられたのでした。

ヨハネもたしかに、奇跡信仰が間違いだとは言っていない。明確に否定することはしていません。しかしながら、ヨハネは 20 章で、主イエスの言葉として こう述べています。「見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20:29)。見て信じる信仰を、あの宗教改革者のルターは「ミルク飲みの信仰」と呼びました。「熱くなつては応答し、すぐに受け入れては信じるものの、気に入らないことや思いがけないことを言われると、これまたすぐにどこかへ行ってしま。う。そんな幼い信仰・・・」と呼んだのでした。

もう 19 年も前になるでしょうか。新聞でこんな記事を目にしました。

超能力でスプーンを曲げられるとして有名になったユリ・ゲラーさん・・・が、自分のイメージを「ポケットモンスター (ポケモン)」のキャラクターに無断で使われたとして・・・メーカーの任天堂・・・と米国任天堂に対し、損害賠償とキャラクターの使用取りやめを求める訴えをロサンゼルス連邦地裁に起こした。

ゲラーさんが問題にしているのは、念<sup>ねんりき</sup>力を使って頭痛を起こさせる日本名「ユンゲラー」というキャラクターで、スプーンを持ち歩いていることから、イメージの盗用だと主張している。

これを読んで、私はなんとも懐かしい思いにさせられたのを覚えています。「ユリ・ゲラーって、まだいたんだ」。それが、記事を読んだ直後の感慨でした。ユリ・ゲラーをはじめ、スプーン曲げの超能力者が次々とテレビに登場して超能力ブームが起こったのは たしか、今からもう 50 年余り前のことだったかと思います。その後も、オウム真理教の教祖の あ<sup>あさはらしょうこう</sup>の麻原彰晃が「空中に浮いた」と言って、それを信者獲得の手段にしました。畳の上で座禅を組んでピョンピョン飛び跳ね、そして「宙に浮いた」と主張したのでした。さらには、早稲田の大槻<sup>おおつき</sup>教授とバトルを繰り広げた、霊能力者を自称する宜保<sup>ぎぼあいこ</sup>愛子という女性もいました。すでに記憶の薄れている、あるいは そもそも御存じでない方々もおられるかもしれません。要するに、彼らは皆、驚きがマンネリ化して迫力が弱まると、繰り返し新種の出し物を携えては 装いを新たにして出直さねばなりません。新装開店の繰り返しです。そのようにして、人々の注目を繋ぎ止めようとしたのです。涙ぐましい努力ではないでしょうか。けれども、こうした受け狙いは結局、みんな忘れられる運命にあります。そこに彼

らの生き様がないからです。彼らの人となり語り、人格を語り、人間としての質を語るものが、そこにはありません。単なるマジシャンは忘れ去られて、消え去ります。

「信じる」とは 奇跡やしるしを信じるのではなく、イエス・キリストという「そのお方」を信じることではないでしょうか。人間同士 愛する人についても、私たちが信じるのは、相手くれたプレゼントでもなければ、相手が建ててくれた家でもありません。信じるのは相手の人「その人」であって、相手の人「その人の真実さ」のはずです。人となりそのものに対する信頼が崩れたら、どれほど素敵なプレゼントを貰っても、どれほど大きな家を建ててもらっても、私はそこに自分を懸けようとは思いません。ヨハネはその点を決して曖昧にしません。ヨハネによる福音書の 2 章には、「信じる」という表現が 3 回 出てきます。そして、そのどれを見ても、「しるしを信じた」とは書かれていません。ヨハネは 11 節で「弟子たちはイエスを信じた」と記し、22 節で「弟子たちは・・・聖書とイエスの語られた言葉とを信じた」と記し、そして 今回の 23 節でも「多くの人イエスの名を信じた」と記しています。信じるのはイエス・キリストという「そのお方」であり、イエス・キリストというお方の「真実」にこそほかならないからです。

ちなみに、奇跡ということについて、三浦綾子さんがその本の中で次のような意味のことをおっしゃっておられました。「人は結局 死ぬのですから、病気の癒やしなど、目に見える物理的な奇跡は 最終的にはそれほど大きなこととは思えません」。私たちは例外なく、いつの日か この世を去らなければならない。であるなら、死をも超えてその向こうにまで続くものを何より探し求めるべきであって、過ぎ去るこの世のあれこれに心を失わないでいたい、と語るものです。病という痛みがあれば、もちろん、それが癒やされるように祈り求めます。貧しさという苦しみがあれば、当然のこと、そこに生活の術が与えられるよう祈り求めます。痛みや苦しみを知っており、人を思う心のある人なら、それは自然な 言うまでもないことです。しかし同時に、事が見えるかたちで期待どおりに成らないときにも、なお、見ないでも信じる信仰に立ちたいと思われています。そこにおられる主イエスそのものに信頼を寄せる信仰に立ち続けたいと思われています。

知人に、B 君という 二度死んだ青年がいます。一度は文字どおり 肉体の死を、一度は 肉体は生きながらも、しかし心の完全な死を味わった若者です。ここでもまた、B 君は信頼を裏切られたのでした。信頼し切っていた相手に、ある日 突然、裏切られて放り出されてしまった。そのようにして不信と絶望の中に置かれた B 君は、自ら命を絶とうとしました。それを間一髪 思い止まらせたのは、自分自身の尊厳と、そして「まだどこかに、真実な人がいるかもしれない」という祈りにも似た、残り火のような微かな感覚だったといいます。しかし、家で待っていたのは、心の通わない、痛みの分からない家族でした。身の裂けるような痛みのなか、B 君は全く独りぼっちでした。体だけが生きている。心は完全に死んでいる。そんな、感覚の失せた毎日が続きました。けれども、その B 君が今、それでも生きている。以前にも増して、強く確かに生きています。「一人の人に出会ったから」と言われます。人を愛し、なのに その愛した人に捨てられ、孤独のうちにたった独りで死ぬことまで味わわれたお方。自分の味わったすべてを自分よりはるかに深く、ずっと多くの傷

を負って味わわれたお方。そこまでして、自分にその心を伝えようとされたお方。そのお方に会ったから、と言われるのです。B君はそうにして、イエス・キリストに救われたのでした。それは、いわゆる奇跡のパフォーマンスとは無縁の出会いでした。むしろ、そうしたものの一つもない、傷を負って十字架に死んでゆかれる、いかにも弱々しく痛々しいキリスト。それが、B君にもう一度、信頼というものを甦よみがえらせたお方でした。B君はそこに 真実の愛を見、本当の強さを見た。そして、「このお方はぼくらとは違う」と感じ取ったのでした。こうしてB君は、イエス・キリストの生き様から、その言葉に嘘うそのないことを信じるに至りました。「ぼくが今生きているのは、イエス様のその約束に信頼しているからにはほかなりません」と、B君はそう語ってくれました。

しるしの向こうに、信仰の深みを見て取りたいと思います。イエス・キリストの生涯全体が最高のしるしなのですから、その生涯を見詰め、その生き様と死に様とを自身の現実と重ね合わせて、それを感じ取りたい。「ぼくらとは違う」イエス・キリストの特別に、そこで触れたいと思わされています。

かとうつねあき  
加藤常昭先生の説教集をめくると、前述のルターがその説教で「教会もまた、過ちを犯す」と語ったとあります。そして、ルターはそれに続けて こう言葉を重ねている、と。

（古代の偉大な神学者）アウグスティヌスもまた、過ちを犯す。そして、私もまた（過ちを犯す）。私もまた、信用できない人間だ。

私たちが自らを知る以上に、その本当の姿を深く御存じでおられるイエス・キリスト。そんななか、それにもかかわらずこの私たちに救いがあるとしたら、神がそんな私たちにも なおもその独り子を賜たまわったからと言う以外に、何と言えるでしょうか。御都合主義の私たちの好い加減いかげんさにもかかわらず、神様のほうから御みこ子を送ってくださり、その御子イエス・キリストを通し、神様の側から身をもって御自身の愛を示してくださったのですから。

初めに申し上げたとおり、今月の箇所は、引き続き 3 章 1 節以下の「主イエスとニコデモの対話」への導入部分ともなっています。ニコデモはいわば、イエス・キリストが批判した当時のユダヤ教社会を象徴する人物と言ってもよいでしょう。ですが、ふたりのやり取りを読み進めていくと、そこにはたして 何を見るでしょうか。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。3 章 16 節の、あの御言葉みことばです。「聖書の中の聖書」と呼ばれる、聖書のメッセージの核心を告げるそれです。その御言葉がなんと、不信のニコデモに向けて語られている。信用のならない人間の本質を記した今回のその箇所の直後、それが繋ぎ入れる本論の「ニコデモとの対話」の中心に、救いに招くその御言葉が置かれているのです。そして、主イエスは続けられます。3 章 17 節、「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」。もうお気づきでしょうか。不信のニコデモもまた この招きの中に置かれている、ということです。否！ より正し



くは、不信のニコデモがその中に置かれている、と言うべきでしょう。すなわち、信頼に欠ける者でありながらも、そんな私たちがこの御言葉の中に置かれている。どこか信用のならない私たちでありながら、にもかかわらず、その私たちが神の愛のこの招きの中に置かれている、ということにほかなりません。恵みの御言葉です。聖書の告げる「福音」の核心、すなわち「良き音信」の中心はここにこそある、と言えるでしょう。聖書はまずもって、「救いの書」だからです。

イエス・キリストは御自身のすべてを<sup>ささ</sup>げ、私たちを愛し抜いてくださいました。その同じ愛をもって、この時もまた 私たちに臨まれ、この私たちの内にも信頼に足るなにかを創ろうとしてくださっているように思います。自らの欠けや足りなさに鈍くなったら、それこそ終わりではないでしょうか。自身を誠実に見つめつつ、しかもなお そこに注がれているもったいない恵みに感謝して、それを豊かに受けたいと願っています。その恵みに信頼して、良きものを内に頂いていきたいと祈り願っています。

〔祈り〕

愛する神様。

すべてはあなたの側から始まりました。あなたがもし 私たちの人となりを基準にされたなら、何もなさらなかったにちがひありません。失望され、憤られ、そして見捨てられたことでしょう。

そんな私たちに あなたのほうから御子イエス・キリストをお送りくださり、救いの手を伸べてくださいました。御子の生涯を心から感謝いたします。私たちの気紛れや至らなさにもかかわらず、それらをも受け止め、信じる者へと 私たちをなおも導いてくださる恵みを感謝いたします。

自らの薄っぺらさと真実の足りなさを悲しむ心を、私たちにお与えください。そして、あなたから来る真実を、泉に渴くように熱心に求めることができますように。そのようにして、私たちの内に、また私たちの間に あなたの<sup>お</sup>創りくださる信頼の実を結ぶことができるよう、上より豊かな助けをお与えください。

主の御名によって祈り求めます。

アーメン